

最後の大杉

内田魯庵

青空文庫

一

おおすぎ

大杉とは親友という関係じゃない。が、最後のひと月を同じ番地で暮したのは何かの因縁であろう。大杉が初めて来たのは赤旗事件の監房生活から出獄して間もなくだった。淀橋^{よどばし}へ移転してから家が近くなったので頻^{ひんぱん}繁に来た。思想上の話もしたし、社会主義の話もしたが、肝胆相照らしたというわけでもないから多くは文壇や世間の噂^{うわさ}ばなしだった。

大杉は興味がかなり広くて話題にも富んでいた。近年^{しき}フアープルのものを頻りに翻譯^{しき}していたが、この種の文学的^{ないし}乃至學術的興

味を早くから持っていて、主義者肌はだよりはむしろ文人肌であった。小説も好きなら芝居も好き、性的研究などにも興味を持って、性的研究に率先した小倉清三郎の「相對」の会などにも毎度出席して、能く「相對」の会の噂をした。

百ひやくにんちよう人町

ひつこを移転して

から家が遠くなったので自然足が遠の

いた。如之のみならず、

神近かみちかや野枝さんとの自由恋愛を大杉自身の

口から早く聞かされたが、

常から放縦な恋愛を

顰ひんしゆく蹙つぶする自分

は大杉のかなりに打明けた正直な告白に

苦虫にがむしを潰つぶさないまでも

余り同感しなかったのを

氣拙きまづく思つたと見えて、

家が遠くなると同時に足が遠のいてしまった。

日蔭ひかげの茶屋の事件があつた時、早

速見舞の手紙を送ると直ぐ自筆の返事を遣よこしたが、

事件が落着し

速見舞の手紙を送ると直ぐ自筆の返事を遣よこしたが、

事件が落着し

速見舞の手紙を送ると直ぐ自筆の返事を遣よこしたが、

でもそれぎり会わなかった。それから程経ほどたって野枝さんと二人で銀座をブラブラしている処へ偶然邂逅でつくわし、十五分ばかり立話しをした事があつたが、それ以来最近の数年間はただ新聞で噂を聞くだけであつた。

大杉が仏蘭西フランスから追返され、神戸へ帰着して出迎えの家族と一緒に一等寝台車で東上した記事が写真入りで新聞を賑にぎわしてから間もなくだった。或る朝突然大杉さんがいらしたと家人が取次いだ。大杉何という人だと訊きくと、大杉栄さかえさんで皆さん御一緒にすといつた。近頃何年にも顔を見せた事がない大杉が、シカモ家族を伴つて来るといふは余り思掛おもけなかつたが、左も右とく二階かへ通せと半信半疑でいふと、やがてトントン階段はしごを上つて来たのは

白地の浴衣ゆかたの紛れもない大杉であつた。数年前の大杉と少しも違わなない大杉であつた。その踵あとから児供こどもを抱いて大きなお腹なかの野枝さんと新聞の写真でお馴染なじみの魔子ちゃんがついて来た。

野枝さんとは数年前に銀座で邂逅であつた時に大杉が紹介してくれた。が、十分か十五分の立話中、大杉から遠く離れていたからこの日が初対面同様であつた。これが魔子で、これがルイゼで、この外にマダ二人、近日お腹を飛出すのもマダあるといつて笑つた。以前から見ると面差おもさしが穏かおだやになつて、取別とりわけて児供に物をいう時は物柔ものやさしく、こうして親子夫婦並んだ処は少しも危険人物らしくも革命家らしくもなかつた。

「イイお父さんになつたネ、」と覚えずいうと、野枝さんと顔を

見合わしてアハハハと笑った。

二

久しぶりで全^{うちじゆう}家^お揃^{そろ}いは珍らしいという、昨日^{きのう}同番地へ移^{ひっこ}転して来たといった。ツイその酒屋の裏だというから段々^き訊くと、近頃まで何とかいう女医が住んでいた家だ。

「あの家^{うち}は本^もとはお医者さんで、移^{ひっこ}転したてに家の堀^{へい}の角^{かど}へ看板を出さしてくれとタウルを半ダース持つて頼みに来た、」という、と、「そんなら僕も看板を出さしてもらおうかな」といった。

「アナーキストの看板じゃタウルの半ダースぐらいじゃ引受けら

れない」といつて笑った。

魔子は臆^{おくめん}面のない無邪気な子で、来ると早々私の子と一緒に遊び出した。野枝さんの膝^{ひざ}に抱かれたぎりのルイゼはマダあんよの出来ない可愛い子で、何をいつても合点々々ばかりしていた。アツチもコツチもお菓子^{よくば}を慾張つて喰^たべこぼすのを野枝さんが一々拾つて世話する処はやはり世間並^{なみ}のお母さんであつた。エンマ・ゴルドマンを私淑する危険な女アナーキストとは少しも見えなかつた。「日本ばかりじゃ騒^{さう}がし足りないと見えて、仏蘭西までも騒^{さう}がして来たネ。雀百^{すずめ}まで躍^{おど}りやまずで、コンナに多勢^{おおぜい}の子持^{こもち}になつてもやはり浮気はやまんと見えるネ」というと、「やはり時代病かも知れない」と大杉は吃^{ども}りながらいった。

「それでも」と野枝さんは微笑^{ほほえ}みつつ、「尾行^{びこう}が申しましたよ。

児供が出来てから大變温和^{おとな}しくなつたと。」

大杉が児供を見る眼はイツモ柔和な微笑を帯びて、一見して誰にでも児煩惱^{こぼんのう}であるのが点頭^{うなず}かれた。野枝さんも児供が産れるたび^{たび}に、児供が長きくなるごとに青鞥^{せいとう}時代の鋭^きどい機鋒^{きほう}が段々と円^{まる}くされたろうと思う。

野枝さんは児供を伴れて先きへ歸つたが、大杉は久しぶりでユツクリと腰を落付けた。正午になつて迎えが来ても根を生^はやして、有^{あり}合^{あい}の午飯^{ひるめし}を一緒に済まして三時ごろまでも話し込んだ。仏蘭西から歸りたてなので、巴黎^{パリ}で捕縛されて監獄^{ほう}へ投^なり込まれた咄^{はなし}をボツボツ話した。尤も纏^{もつと}まつた話でなく、断^{ちぎ}れ断^{ちぎ}れで思想上

の立入った問題には触れなかった。路傍演説をして捕縛された咄はしたが、その演説の内容は訊きもしなかったし話しもしなかった。ただ仏蘭西人は一般に案外日本人よりも無知で、何しに来たというから社会学を勉強に来たという、その社会学という言葉の意味の解るものが少かったという事や、仏蘭西の巡査が人格も知識も日本の巡査よりも低劣で、第一言語からして野卑で、教養ある仏語が全く通じないという事や、仏蘭西の監獄が不整頓で不潔で、囚人の食事が粗悪で分量が少く、どの点から見ても日本の監獄以下であるという事や、何くれとなく仏蘭西を貶した話ばかりした。

「ただ仏蘭西の監獄で便利なのは差入さしいれの自由です。日本同様監

獄の前に差入物屋があつて、錢さえ出せばどんなウマイものでも、酒でも煙草でも買う事が出来ます。僕は余り酒を喫^やらんが、書^{しよも}物は格別持たず、面会に来るものはないし、退屈で堪^{たま}らんから白葡萄酒を買つてゴロゴロしながらチビチビ飲む。三日で一本明けたが、終日陶然としてイイ心持でした。錢さえあれば仏蘭西の監獄はさほど苦しくない。当てがいの食物が足りなくても不味^{まず}くても差入物屋から取りさえすれば相当な贅^{ぜいたく}沢が出来ます。氣樂に読書でもしていようてには仏蘭西の監獄は贅沢が出来て氣が散らんから持つて来いですよ。」

そんな話をして半日を何年ぶりで語り過ごした。

三

それから四、五日して銭湯で会った。魔子を伴れて洗粉あらいこや石鹼せっけんや七ツ道具そろを揃えて流しを取ったこの児煩惱のお父さんが、官憲から鬼神のように恐れられてる大危険人物だとは恐らく番台の娘も流しの三助さんすけも気が付かなかつたろう。が、表へ出て見ると湯屋の角の交番で飛白かすりの羽織の尾行が張番はりばんをしていた。

ツイ眼と鼻との間におりながらそれぎり大杉は来もしなかったし、私もお産があつたと聞いたが見舞にも喜びにも行かなかつた。が、大杉は始終乳母車うばぐるまへ児供を乗せて近所を運動していたから、能く表で出会つては十分十五分の立話しをした。魔子は毎日遊び

に來たから 全^{うちじゆう}家が馴染^{なじみ}になり、姿を見せない日は殆^{ほと}んどなかつたから、大杉や野枝とは余り顔を合わせないでも一家の親しみは前よりは深かつた。

九月一日の地震のあと、近所隣りと一つに凝^{かた}まつて門外で避難していると、大杉はルイゼを抱いて魔子を伴れてやつて來た。

「どうだつたい。エライ地震だね。君の家は無事だつたかね？」と訊くと、

「壁が少し落ちたが、大した被害はない。だが、吃^{びっくり}驚した。家が潰^{つぶ}れるかと思つた。」

「下^{したまち}町はヒドかろうナ。安政ほどじやなかうが二十七年のよりはタシカに大きい。これで先ず当分は目茶苦茶だ。」

「だが僕は、毎日々々セツ付かれて困つてたんだから、地震のお庇^{かげ}で催促の手が少しは緩^{ゆる}むだろうと地震に感謝している、」と軽く笑つた。何でも大杉は改造社とアルスから近刊する著書の校正や書足^{かきた}しの原稿に忙殺されていたのだそうだ。

かれこれ小^こ一時間も自分たちと一緒に避難していたらう。余震の絶間^{たえま}なく揺^ゆる最中で、新宿から火事が出たとか、帝劇が今燃えてるとかいう警報が頻りであつたので、近所隣りの人々がソワソワして往^いつたり来たりしていた。

そこへ安成^{やすなりじろう}二郎がコダツクを下げて来て、イイ獲物もがなとソコラココラの避難の集まりを物色していた。

「ドウだい、」と私は安成に向つていった。「大杉に何処^{どこ}かソコ

ラの木の下に立つてもらつてアナーキストの避難は面白かろう。」

大杉は笑つていた。安成がこの写真を撮^とつたら好い記念だつたろうに、惜しい事をした。（後に聞くと、それから大杉の自宅へ行つて大杉夫妻を庭前で撮^{うつ}したのだが、名人だから光線が入つたのだそうだ。）

その晩は恐怖に明けて翌る朝、近所の川^{かわ}本の原に大^{おお}勢^{おぜい}避難していると聞いて容子を見に行つた戻りに大杉の家を尋ねると、マダ寝ていたが私の声を聞くと起きて来た。

「能^よく家の中に寝たネ、」というと、

「大抵大丈夫だろうと度胸をきめて家の中で寝た。尤も、」と堀^{へい}の外を指^さして、「彼^{あそこ}処へ避難所を拵^{こさ}いて置いて、率^いざといえは直

ぐ逃げ出す用意はしていた。アナーキストでも地震の威力には協かなわ
ない、」と笑った。

九月の上半は恐怖時代だった。流言蜚語ひごは間断なく飛んで物情
きようきよう

恟々きようきよう、何をするにも落付かれないで仕事に付かなかつた。

大杉も引籠ひきこもつて落付いて仕事をしていられないと見えて、日に

何度となく乳母車を押しては近所を運動していたから、表へ出る
とは番毎ばんごに邂逅であつた。遠州縞えんしゅうしまの湯上りの尻絡しりからげで、プロの

生活には不似合いな金紋きんもんくろぬり黒塗の乳母車を押して行く容子は抱か

えの車夫か門番が主人の赤ちゃんのお守をしているとしか見えな
かつた。地震の当座、私の家の裏木戸は大抵明け放しになつてい
たので、能よく裏木戸からヒョッコリ児供を抱いてノツソリ入つて

来ては縁端へ腰を掛けて話し込んだ。

日は忘れたが或る晩、夜警の提ちようちん灯とうを持って家の角に立つて

ると、買物帰りらしい野枝さんが通り掛つて声を掛けた。左の手には大きな部厚ぶあつの洋書を二冊抱え、右には新聞と小さな風呂敷ふうしきづつ敷み包みを下げていた。

「報知の夕刊を御覧なすつて？」

「否いい工。」その頃はマダ新聞が配達されなかった。

「鎌倉は大変ですワ。八幡さまが潰れて大仏さまが何寸とか前へ揺り出しましたって。御覧なさいまし、」と手に持つ新聞を見せた。

提灯あかりの照明ではハッキリ解らなかったが、ちよつと覗のぞいて直ぐ

返すと、

「お宅へ持ってらしつて御覧なさいまし、」と頻りにいったが、野枝さんも今買つて来たばかりでマダ読まないらしいので無理に押返した。

「夜警は大変ですワネ。家から椅子を持って参りましょうか。イクラもありますから。」

「イエ、家にも持ってくればあるんですが、面倒だもんですから。」

「そうですか。でもお草臥くたびれでしょうネ。大杉も御近所同士で家の角へ夜警に毎晩出ておりますワ。町内のお附合いですもの、」と野枝さんはいった。

能く大杉は夜警に出ると思つたが、實際毎晩ステツキを持って、自宅の曲り角へ夜警に出ていたのを見た。

四

鮮人襲来の流言蜚語が八方に飛ぶと共に、鮮人の背後に社会主義者があるという声がイツとなく高くなつて、鮮人狩が主義者狩となり、主義者の身边が段々危うくなつた。この騒ぎを余所^{よそ}に大杉は相変らず従^{しようよう}容として児供の乳母車を推して運動していた。「用心しなけりやイカンゼ」と或時邂逅^{であ}つた時にいうと、「用心したつて仕方がない。捕^{つか}まる時は捕まる」と笑つていた。

後に聞くと、大杉に注意したものは何人もあつたが、事実この頃の大杉は社会運動からは全く離れて子守ばかりしていたから、危険が身に迫つてるとは夢にも思つてないらしかった。

或る夕方、夜警に出ていると、警官が四、五人足早に通り過ぎながら、今二人伴つれて来るから殴ぶつちやア不可いんぞと呼ばわつた。その頃の自警団は氣が立つていて、警吏が検挙して来たものにさえ暴行を加えて憚はばらなかつたからだ。

誰か挙げられるナ、主義者だろうと、誰いうとなく予覺して胸を躍らしていると、やがて七、八人の警吏が各々弓張ゆみはりを照らしつつ中背ちゆうぜいの浴衣掛けの尻端折しりはしおりの男と、浴衣に引掛け帯ひっかの女の前左右を囲んで行く跡から四、五十人の自警団が各々提ちよう

灯^{ちん}を持ってゾロゾロ従^{したが}いて行^いった。

提灯の薄明りで夜目にはシカと解^とらなかつたが、背^せ恰好^{かっこう}が何となく似^にていたので、「大杉じゃないか知らん、」と、ハツと思つて急に不安になつたので、大杉の家へ曲^{まが}る角の夜警の集まりへ行^いった。そこにはいつでも警吏がいた。

「今のは鮮人ですか？」と訊くと、「鮮人じゃない、」と誰かが答^{こた}えた。

「ドコで挙げられたんですか、」と重ねて訊くと、「直^すぐソコの自宅で挙げられたんだ」と同じ人が答^{こた}えた。

「大杉じゃないですか、」と思切つて明らさまに訊くと、

「イヤ、大杉じゃない。大杉は家にいる、」と警察官らしいのが

答えた。

それでヤツと安心したが、マダ何となく不安で、家へ帰つて床に就いてからも警吏と自警団に護送されて行く男女の後姿が眼にチラクラした。（後に聞くと、この男女は直ぐ近所の近頃検査された或る社会主義者の家の留守番をしている某雑誌記者で、女は偶然居合わせた主義にも何にも関係のないものだそうだ。この男は沖縄人で相貌そうぼうが内地人らしくないので疾とうから覷ねらわれていたのだそうだと、当人が後に来ての話である。）

その頃から大杉に対する界かいわい限の物騒な噂が度々耳に入った。大杉は外国の無政府党から資金を持つて来て革命を起そうとしているとか、大杉は毎晩子分を十五、六人も集めて隠謀を密議して

いるとか、「あんな危険人物が町内にいては安心が出来ないからヤツつけてやれ」とか、或る近所の自警団では大杉を目茶苦茶になく殴つてやれという密々の相談があるとか、うそ まこと嘘か実か知らぬがそういう不穩の沙汰を度々耳にした。随分相当分別のある人までがそういう虚聞を信じて、私と大杉とが交際あるのを知らないで、

「アナタのお宅の裏には大變な危険人物がいて、毎晩多おおぜい勢集つて隠謀たくを企らんでるそうです、」と告げたものもあつた。同じ近

所の或る口利きの男は、これも大杉と私と友人關係であるのを知らないで、「柏かしわぎ木には危険人物がある、大杉一味の主義者を往來ならへ列べて置いて、片かた端っぱしからピストルでストーンストン打つたら小氣味こきみが宜よかるう」とパルチザン然たる氣焰きえんを吐いてイイ氣持

になつてゐるものもあつた。

こういう危険な空氣が一部に醸^{かも}されてゐるのを知つてゐるのか知らないのか、大杉は一向平氣で相變らず毎日乳母車を押していた。近所に住む大杉の或る友達がそれとなく警戒したが、迫害に馴^なれてゐる大杉は平氣な顔をして笑つていたそうだ。ただ笑つてゐるばかりならいいが、「俺を捕^{つか}まえようてには一師団の兵が要^いる」ナドト大言していた。大杉にはこういう児供げた見^み得を切つて空言を吐く癖があつたので、この見得を切るのが大杉を花やかな役者にもしたが、同時に奇禍を買う原因の一つともなつた。

五

九月の十六日の朝九時頃、大杉は野枝さんと二人連れで、二人とも洋装で出掛けるのを家人は裏庭の垣根越しにチラと見た。直ぐ近くの聖書学院の西洋人だろうと思つてると、丁度遊びに来ていた魔子も後影^{うしろかげ}を見ると周章^{あわ}てて垣根の外へ飛び出したが、すぐ戻つて来て、「家のパパとママよ」といった。

その日の午後魔子は来て「パパとママは鶴見^{つるみ}の叔父^{おじ}さん許^{ところ}へ行ったの。今夜はお泊りかも知れないのよ」といった。

それぎり大杉は姿を見せなかった。が、自分もその頃余り表へ出なかつたから大杉を見掛けないでも格別気にも留めなかつた。

二、三日経つと大杉が検挙されたという風説が立つた。その前

にも地方から来た或る男が、大杉は拘留されて留置檻^{かん}へ入れられたまま火事で焼死^{やけし}んだそうだなというから、大杉は直ぐこの近所にいて、毎日乳母車を押して運動しているといつて無根の風説を笑った事があるので、復^また例の風説かと一笑に附していた。

するとその翌る晩、十一時過ぎに安成が来て、「大杉が行方^{ゆくえ}不明^{めい}となりました、」と痛^{ひど}く昂^{こう}奮^{ふん}して、「十六日鶴見へ行つたぎり^{めい}で帰つて来ません。家でも心配して八方捜しているがサツパリ踪跡^{ゆくえ}が解りません。検挙されたなら検挙されたでドコかの警察に
いそうなもんですが、ドコの警察にもいません。警察では検挙したものを検挙しないと秘^{かく}す事は絶対^{かく}にないので、全く警察には
ないようです、」と満面不安の色を湛^{たた}えて昂奮して話した。

ちなまぐさ

血 腥 い噂がそこら中に広がってる時である。女のような美

術家が 袋 ふくろ 叩きにされて半死半生になったという噂も聞いてい

る。温厚玉のような君子が歴 れつき とした官職の 肩 かた 書 がき 附きの名刺を示

しても聞かれないで警察へ拘留されたという話も聞いている。ま

してや大杉のような官憲からも睨 にら まれ民衆の一部からも呪 のろ われて

る人間は何時 いつ どんな処で奇禍を買わないとも限らんから、行方不

明になったと聞くと不安に堪えられなかった。

安成は、その日あたかも戒嚴軍司令官を初め二、三の陸軍の重

職が交迭し、一大尉一特務 そうちよう 曹 そう 長が軍法会議に廻されたという

明日発表される軍憲の移動を話して、こういう重職の交迭は決し

て尋常事 ただごと ではない。よほどの重大な原因がなければならぬ。当

局者の言明に由れば数日前に突発した事件に關聯するというのが、その突発事故というのは何だか、マダ発表を許されないと堅く緘^か黙^{んもく}している。が、ウツカリ当局者が滑^{すべ}らした口^{くちぶり}吻^ふに由ると不法殺人であつて、殺されたものは支那人や朝鮮人でないのは明言するといふのだ。

「どうもそれが大杉らしいのです、」と安成は痛く昂奮していた。ヨモヤとは思ふが、大杉は野枝と一緒に鶴見の弟の家から季^{すえ}の妹の子を伴れて、弟に送られて川崎まで歸つて来たのはタシ力で、それから先きが行方不明なのだそうだ。マサカに足^{あし}弱^{よわ}を連れて交通の不便なこの際に野越え山越え行方を晦^{くら}ましたとは思われな^い。ドコかに拘留されてるに違ひないが、ドコの警察にもいない

とすれば陸軍より外にはない。が、陸軍では知らないという。が、支那人でも朝鮮人でもないものを殺した不法殺人で戒厳軍司令官初め二、三の重職が解職され、一、二の軍憲が司法へ廻されたと、いうこの日の突発事件はヨモヤとは思うがドウも大杉と関聯しているらしいというのが安成の憶測であつた。

が、その翌る日も、そのまた翌る日も魔子は相変らず遊びに來た。児供の事で周囲の不安には一向感じないらしく、毎日來ては家の児供と一緒に歌を歌ったりダンスをしたりして無邪氣に遊んでいた。大杉の家もヤヤ人出入ひとでいりが繁しげく取込んでるらしく想像されたが、安成もそれぎり見えないので、不安を感じながら身の雑事に紛れていると、或時魔子がイツモの通り遊びに來ていると

家から迎えが来て歸つた。暫らくすると復た来て、新聞社の人が来て写真を撮つたのよといった。新聞社が児供の写真を撮りに来たというは尋常ではないので、恐ろしい悲痛な現実面に面する時が刻々迫つて来たような感じがした。

その翌日である、大杉の非業の最期が公表されたのは。恐ろしい予感が刻々迫つて来て、こういう悲惨を聞く日があるのを予期しない事はなかつたが、その日の朝刊の第一面の大活字を見た時は何ともいい知れない悸おののきが身体中からだじゅうを走るような心地こころがした。殊に軍憲から発表された大杉外二名の一人がマダ可憐かれんな小児であると思うと、三族を誅ちゆうする時代の軍記物語か小説かでなければ見られない余りの殘虐に胸が潰れた。

朝の食卓は大杉夫婦を知る家族の沈痛な沈黙の中に終った。今日も魔子は遊びに来るかも知れないが、「魔子ちゃんが来ても魔子ちゃんのパパさんの咄はなしをしてはイケナイよ、」と小さい児供を戒めた。何にも解らない小さい児供たちも何事か恐ろしい事があったのだという顔をして、黙って点頭うなずしていた。

暫らくすると魔子は果して平生いつもの通り裏口から入って来た。家人を見ると直ぐ「パパもママも死んじやったの。伯父さんとお祖父いさんがパパとママのお迎えに行ったから今日は自動車で帰って来るの、」といった。お祖父さんというのは東京より地方へ先きに広がった大杉の変事を遠い郷里の九州で聞いて倉皇そうこう上京した野枝さんの伯父さんである。

茶の間へ来て魔子は私の妻を見て復た繰返した。「伯母さん、
パパもママも殺されちゃったの。今日新聞に出ていましょう。」
私は児供たちに「魔子ちゃんのお父さんの咄をしてはイケナイ
よ、」と固く封じて不便な魔子の小さな心を少しでも傷めまいと
したが、^{れいり} 伶俐な魔子は何も彼も承知していた。が、物の弁えも十
分でない七歳の子である。父や母の悲惨な運命を知りつつもイツ
モの通り無邪気に遊んでいた。^{おな} 同い年の私の児供は魔子を不便が
ったと見えて、^{だいじ} 大切にしていた姉様や千代紙を残らず魔子に与
ってしまった。

六

その日は大杉の遺骸いがいが帰るといので、留守番だけの大杉の家へ二度も三度も容子を聴きに行つた。この晩は大杉に親しいものだけが遺骸の前で通夜つやするという予定だったので、午後からは待受けしてボツボツ集まるものがあつた。自働車の音の響く度毎たんびに耳を傾けたが、イツまで待つても帰つて来なかつた。その中に遺骸は直ちに自宅へ引取るはずだったが、余り腐爛ふらんしているので余儀なく直ちに火葬場へ送棺したと知らせて来た。

その夕方、遺骸を引取つて火葬場まで送つた近親同志が帰つて来た。待受けた我々は官憲の口から語られたという大杉の殺害された顛末てんまつや、引渡された遺骸が腐爛して臭気が鼻を衝ついて近寄

る事さえ出来なかったという咄を聞いた。大杉の思想の共鳴者でなくともその悲惨な運命には同情せずにはいられなかった。

その翌々日の朝、大杉外二名の遺骨は小さな箱へ入れられて自宅に迎えられた。大杉は無宗教であったが、遺骨の箱の前に三人の写真を建て、祭壇を設けて好きな葡萄酒と果物を供えた。その晩は近親と同志とホンの少数の友人だけが祭壇の前に^{まじい}団居して、生前を追懐しつつ香を^{たむ}手向けて形ばかりの告別式を営んだ。門前及び附近の要所々々は物々しく警官が見張って出入するものに一々眼を光らした。^{おりあ}折悪しく震災後の交通がマダ常態に復さないの^{よいうち}で、電車の通ずる宵の中に散会したが、罪の道^{みちづ}伴れとなった不運の宗一の可憐な写真や薄命の遺子の無邪気に遊び戯れるのを見て

は誰しも涙ぐまずにはいられなかった。大杉の一生を花やかにした野枝さんとの恋愛の犠牲となつた先妻の堀保子も、イヤで別れたのでない大杉に最後の訣別わかれを告げに来て慎ましやかに控えていたが、恋と生活とに瘦れた姿は淋しかった。やつ（大杉と別れた後の堀保子は大杉は必ず再び自分の懷ろふところに戻ってくるものと固く確信して孤独の清い生涯を守っていたが、大杉が果敢はかなくなつた後はその希望も絶えて、同棲時代からの宿痾しゆくあが俄に重につて、去年の春終ついに大杉の跡を追つて易簣えきさくした。大杉の生涯は革命家の生血なまちの滴したたる戦闘であつたが、同時に二人の女に纏もつれ合う恋の三つ巴の一代記でもあつた。）

告別式の済んだ跡の大杉の家は淋しかった。遺子を中心として

野枝さんの伯父さん老夫妻と大杉の実弟と、大杉の異体同心たる数四の同志に守られていた。刑事の眼は門前に光つて看慣れぬものは一々誰何^{すいか}したから、誰もイイ氣持がしないで尋ねるものが余りなかった。いよいよ明日は一と先ず郷里へ引上げるというその前夜、長い汽車の旅の児供の眠氣ざましにもと些^{いささ}かの餞^{はなむ}けを持つて私の妻が玄関まで尋ねた時も誰何され、何の用事かと訊問された。

十月二日だった。五人の遺子は野枝の伯父さん老夫婦に伴われてこの恨の多い父の家を跡に郷里へと旅立った。親しい友や同志に送られて行つたが、魔子は先きへ立つて元気よく「さよなら、さよなら！」といつて駈^かけて行つた。パパもママも煙のように消

えてしまった^{かなし}悲みをも知らぬ顔の無邪氣の後ろ姿が涙ぐましかった。

（大正十二年九月記　○大正十三年十月補筆　○改造社出版
『大正大震災災誌』中所掲「甘粕対大杉事件」参照）

追記

大杉が警察のスパイであつて主義者の秘密を供給していたので、大杉殺害が警察と陸軍との反目になつたという噂が当時或る一部に広がった。近頃また警視庁の特高課とスパイの関係が暴露されて問題となつたについて、警視庁のスパイには往々意外の人があ

るという話から大杉もまたスパイであつたように臭わした或人の談話が某紙に載つておる。

一体噂ぐらいアテにならぬものはないので、大抵な噂の出処がでたらめ出鱈目である。出鱈目でないはずの当事者や関係者の話からしてアテにならぬのが多い。大杉が果してスパイであつた乎否乎の謎は大杉自身が鍵かぎを握つてるので、余人の推測は余りアテにならないが、大杉がもし果して真にスパイであつたなら問題の何とかいう男のように月給何百円も貰つて自働車で出入しないまでも最う少し貧乏しないでも済んだらう。貧乏してまでも同志を欺く苦肉の謀はかりごとをしてお上の御用を勤めていたというなら、それこそ楠くすのきの謀まさしげをまさしげば正成まさしげほどでなくとも赤穂あこうの義士ぐらゐに値踏み出来る国家の

功労者である。沖^{おき}や横^{よこ}川^{かわ}と一緒に招魂社に祀^{まつ}られてもイイわけだ。

大杉は時^{とき}偶^{たま}金^{かね}が手に入るとむやみと自働車を飛ばしたりして不相当な贅^ぜ沢^{いたく}をするので同志者の反感を買った。この贅^ぜ沢^{いたく}の資本^しがもしスパイの報酬^{ほうご}として請^う取^けった金^{かね}なら公々然^{こうこうぜん}と同志の前で札^しび^らを切る事は豈^よ夫^も出来^こなかつたろう。大杉は一時は米^{こめ}塩^{えん}に^{こと}事^か欠^かいた苦境^{くるし}に苦^{くる}んでいた事もあつたが、最後の柏木に落付いた時は八十円の家賃を払い、奉公人も置き、夫婦から児供までが洋装でかなり贅^ぜ沢^{いたく}な生活をしていた。が、これがもしスパイの余得であつたなら同志を欺^{あや}めたためにもこういう不当所得^{ふたうしとく}の看^みえ透^すかされるような真^ま似^ねは決^けして做^しなかつたろう。

大杉が誰の口入くにようであつたかまたどういふ名目であつたか知ら

ぬが後藤子爵から若干金（タシカ三百円だと思つた）を貰つたのは大杉自身から聞いている。私に話したくらいだから公々然と誰

に話しても差さしつかえ支ない金であつたのだろう。また大杉が警視庁

に頼まれて仏訳の法華經ほけきようの賃訳をした咄もやはり大杉から聞いた。

一体仏典を歐洲語から邦訳するといふも逆な話であるし、第

一警視庁が何の必要があつて法華經を訳させたのか、頗るすこぶ変挺へんていこ

な話であるが、これは大杉を窮地に陥れておとし自暴自棄させないため

の生活の便宜を与える高等政策であつたろう。後藤子爵が何らか

の名目で金を与えたのもやはり同じ意味で、大杉を手馴てなずけて犬

とするツモリでもなかつたろうし、また高が三百円かそこの僅

かばかりの目腐れ金に尻尾しつぽを振る大杉でもなかった。（危険人物の激発を緩和する手段としてのこの種の高等政策は一向珍らしくないので、幸徳秋水こうとくしゅうすいも長い肺患の療養費を或る筋から給せられていたはずである。）

大杉の巴黎パリへ行つた洋行費が問題となつた。後藤子爵から或る中間者を通じて与えられたという説があるが、大杉が子爵から何百円かを貰もらつたのはモウ十四、五年も前で、二者の關係が今まで長く継続していた乎否乎は疑問である。大杉が柏木へ移転して来て久しぶりで会つた時、私が第一に訊いたのはまたこの洋行費の出処であつた。「本屋へ出鱈目のウソをついて七処ななところ借をしたのサ、」と大杉はいつた。大杉の本が売れるにしたらところで二軒や

三軒の本屋で欧羅巴へ出掛ける旅費が調達出来るかとその時は疑ったが、死後に大杉が本屋に残した負債が一万円以上ある事を聞いて打明け咄のまるきりウソでなかった事が解った。大杉がいよいよ帰朝するからと送金を打電した時に野枝が調達に奔走して七処借をして漸とこさと工面したという咄は大杉の帰朝前に聞いている。それ以外に領事館からも汽船賃その他を立換えてもらったそうだ。神戸へ帰着してから出迎えの野枝や児供と共に一等寝台車で東京へ帰った汽車賃は大杉の自由行動を防止して同志から遮^し断^{やだん}する必要上官憲が支弁したのである。前後の事情から考えて見てもこの疑問の渡欧費は全部が本屋から調達したのでなくとも、^{うしろぐら}後暗い金の出場が別にあつたとは思われない。

歴史上の事実には、今だに真相が解らなくて黒白のハッキリしない人物が少くない。大杉が果してスパイであつた乎否乎はマダ謎であるが、大杉の人物性行や日常生活から推してスパイであつたとはドウしても考えられない。大杉は直情径行でスパイの勤まる柄がらではない。もしその一本気いっぽんぎな肝癰かんしゃくや傍若無人ぼうじやくぶじんな傲岸うがんが世間や同志を欺くの仮面であるなら、それは芝居が余り巧み過ぎる。ワザワザ旅費を遣つかつて仏蘭西まで行つて、仏蘭西の監獄に入れられて仏蘭西人までを欺く必要もなかつたろう。

芝居乎何乎は知らぬが大杉はアナーキストとして死んだ。百年まれ稀に見る自然の大破壊を背景として大陸軍を背後に控える一軍憲の手でアナーキストに相応ふさわしい最後の幕を閉じた。歐洲戦の開幕

の血祭となつたジョーレスの運命はあたかもこれに等しいもので、殺害当時大杉はしばしばジョーレスと比較されたが、ジョーレスの遺骸は今やパンテオンに祀^{まつ}られようと騒^{さわ}がれておるそうだ。骨となつてまでも宇宙にさまよつた大杉は永久に浮ぶ瀬はあるまいが、鼠色でも鳶^{とび}色でも歴史上の大立^{おおだて}物となつたのは切^せめてもの満足であらう。

（大正十三年十月追記）

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷発行

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「読売新聞」

1923（大正12）年10月2日～6日、8日

※初出時の表題は「此頃の大杉の思い出」です。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

最後の大杉

内田魯庵

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>